

駿府の尼御台・寿桂尼

戦国乱世の頃、「駿河の尼御台」と言われた女性がいる。桶狭間の戦いで、織田信長に滅ぼされた今川義元、その母親、悠姫・寿桂尼である。

権大納言・中御門宣胤の二女として生まれ、戦国大名今川氏親に嫁いだ。

応仁の乱のあと、所領の荘園を武士階級に奪取された京の公家たちは経済的に困窮し、守護大名・戦国大名に頼らざるをえなくなり、縁を繋ぐ手段として、娘を大名に嫁がせることが多くなされた。悠姫・寿桂尼もその一例である。

今川氏親は駿河地方を支配する大大名であったが、晩年は病がち、寿桂尼は病床の夫を補佐し、それは10年もの長きに亘ったという。この間、後に今川家の家訓となる「今川仮名目録」が作成され、寿桂尼とその側近が氏親の名で発布したと言われる。氏親の死後、嫡男・氏輝が14才で家督相続するが、幼い当主に代わって寿桂尼が公的文書を発給し、「歸」（とつぐ）の印判を用いた。これは悠姫が今川氏親に嫁ぐときに父・宣胤が持たせた印判であり、現在25通が確認されている。

戦国時代に女性が、自らの印形で公文書を発給した例はなく、鎌倉時代に政治の中心にいた北条政子に擬えて「駿河の尼御台」と言われる所以である。

氏輝が36才で夭折、相次いで次男・彦五郎も死去すると寿桂尼は、出家していた梅岳承芳（善元）を還俗させる。側室の子・玄広恵探との家督争い（花倉の乱）が起るが、これを制した善元が家督を継ぎ、以後今川家を運営することになる。

桶狭間で信長に敗れ命を落とした善元は、無能で哀れな武将に写るが、実は彼の治世で今川家は安定し勢力を伸張させる。東海第一の大大名となり、群雄割拠する武田信玄、上杉謙信などの戦国武将たちに先んじて上洛を果たす途中で戦死してしまうのである。

義元は公家達を招き、京から遠く離れた駿府の地に王朝文化を取り入れ花開かせた。これに協力し主導したのが寿桂尼であることは論を待たない。

徳川家康が幼少から成人し、嫁（築山御前）を貰うまで駿府今川家で人質として生活する間、実質上の後見人として面倒見たのが義元である。

善元の死後、孫の氏真を補佐して政治に関わったが、今川家没落への徴候は抗い難く、その最中、今川館で死去する。80才代半ばと推定される。

寿桂尼の生涯については、NHK大河ドラマ（風林火山、おんな城主直虎）に描かれ、藤村志保や浅丘ルリ子が演じている。

また、永井路子の長編小説「姫の戦国」の主人公として彼女の生涯が描かれている。